Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-12-05

特性罪悪感と「甘え」および抑うつの関係

大西, 将史

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,1(1):25-34

(Issue Date)
2007-11-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/80060004

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/80060004

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
研究紀要第１巻第１号　2007

研究論文

特性罪悪感と「甘え」および抑うつの関係 -
The Relation between Trait Guilt , “Amae” , and Depression

大西将史*
Masafumi OHNISHI*

本研究の目的は,「甘え」理論にもとづき, TGS（Trait Guilt Scale）で測定される不適応的な特性罪悪感と,「甘え」および「抑うつ」の関連構造を検証することである。重回帰分析の結果にもとづいて構成したパス解析モデルについて分析を行ったところ,「甘え」尺度の「とらわれ」が TGS の全下位尺度に正の影響を及ぼしており,「とらわれ」が不適応的な特性罪悪感に正の影響を及ぼすという仮説が支持された。また,「精神内的罪悪感」が「抑うつ」に正の影響を,「関係維持のための罪悪感」が負の影響を及ぼしており, 不適応的な特性罪悪感が「抑うつ」に正の影響を及ぼすという仮説は部分的に支持された。最後に,「とらわれ」が「抑うつ」に正の影響力を及ぼしていることから,「とらわれ」が「抑うつ」に直接的に正の影響を及ぼすという仮説が支持された。これらの結果は「甘え」理論を支持するものであるとともに，不適応的な特性罪悪感は単純に抑うつを高めるだけでなく，日本文化的特徴を有する「関係維持のための罪悪感」が「抑うつ」を抑制するという複雑な因果構造があることを示唆するものであった。

問題と目的

我々は何か悪いことをしたり，人に迷惑をかけたりすると，しばしば罪悪感に苛まれる。また，実際に行動に移さないまでも，不適切なことを考えたりするだけで罪悪感が生じ，それを行うことを抑制することもある。罪悪感は，法律上の罪だけでなく，倫理的，宗教的，道徳的規範に背いたあるいは背こうとした時に感じる自己を責める感情である（横田 , 1999）。欧米においては，guilt がこれに相当し，後悔，良心の呵責，悪いことをしてしまったことへの失望を意味すると考えられている（Tangney, Wagner, Fletcher, & Gramzow, 1992）。

欧米において，これまで罪悪感は，私的な状況で生じる極めて内面的な感情であるとされてきた。これは，キリスト教社会である欧米において，罪悪感とは神（すなわちこれが内面化されたものとしての個人の良心）との間で生じ，懺悔によってそれを告白することでのみ許されるという宗教的・思想的な背景が大きな影響力を持っているからである。そのため，罪悪感が個人の内的な行動基準や道徳的規範を逸脱することから生じるということが広く認められている（Hoffman, 1977, 2000; Lewis, 1992; Mascolo & Fischer, 1995; Stipek, 1995），しかし，最近の研究では，罪悪感が内面的な感情であるだけでなく，対人関係場面において経験することが多いことから，対人感情であるという認識が一般的になっている（Tangney, 2002; Tangney & Salovey, 1999）。例えば，成人の罪悪感経験を調査した研究では，私的な状況においてよりも，公的な状況で罪悪感をより経験することが明らかになっている（Tangney, Miller, Flicker, & Barlow,1996）。また，子どもの罪悪感経験について調べた研究においても同様の結果であった（Tangney, Marschall, Rosenberg, Barlow, & Wagner, 1994）。

このように，罪悪感が対人感情であることから，罪悪感にみられる適応的機能も，対人関係に密接に関連したものである。例えば，罪悪感を経験すると，自分のしてしまったことについて懺悔し，元に戻そうとする。また，それによって壊れかけた他者との関係を修復すべく謝罪したり，賠償したりしようとする。このように，罪悪感には，補償的行動へと動機づけるという機能があり（Baumeister, Stillwell, & Heatherton, 1994; Hoffman, 2000），これによって傷ついた自己像が修復され対人関係が維持される（有光 , 2006）。また，Baumeister ら（1994）は，罪悪感の適応的機能として対人関係を高めるような行動パターンへと動機づける機能を指摘している。

しかしながら，このような適応的機能を示す一方で，罪悪感が精神的健康や対人関係を阻害することがあり，うつ病や対人恐怖症に関連することが指摘されている（Freud, 1917; 木村 , 1972; 内沼 , 1977）。Tangney & Salovey（1999）によると，このような場合，罪悪感が慢性化していたり，罪悪感を感じる文脈の適切さに問題が生じている。すなわち，感じる必要のないような不合理なことに対

＊神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程

（2007年４月１日　受付
2007年６月１日　受理）

してや，普通の人が感じないような状況で罪悪感を感じてしまうのである。そのため罪悪感が本来備えている適応的機能が発揮されず，精神的安定が保たれなくなってしまうのである。

このように，罪悪感には，適応的機能が備わっている一方で精神病理に結びつくという否定的側面がある。本研究では，罪悪感の否定的側面に注目し，それがどのようなメカニズムで生じ，どのような問題に結びつくかを明らかにしたい。その際に，感情としての罪悪感ではなく，個人のパーソナリティ特性である特性罪悪感（trait guilt: Jones & Kugler, 1993; Jones, Kugler, & Adams; 1995; Kugler & Jones, 1992; 大西 , 印刷中）という概念を取り上げる。特性罪悪感とは, 即時的な状況を越えて内的に潜在する罪の感覚と定義され，罪悪感を経験する傾向の個人差を意味する（Kugler & Jones, 1992; 大西 , 印刷中）。特性罪悪感に注目することで，罪悪感を感じる個人のパーソナリティ特性について分析することができ，それによって，特性罪悪感が他のどのようなパーソナリティ特性や精神病理傾向と関連しているかということを検討できる。

さて，どのようなパーソナリティ特性が不適応的な特性罪悪感に影響を及ぼすのであろうか。先行研究では，罪悪感を導くものとして共感性が指摘されている。Hoffman（2000）によると，罪悪感は自分の行いによって他者に苦痛を与えてしまったという認識から生じるため，そこには苦痛な状態にある他者に対して共感的感情をもつことが必要である。そのため，共感性の高い人は他者に何らかの害を与えた場合には，罪悪感を感じやすいということになる。しかしながら，本研究で取り上げる不適応的な特性罪悪感は，必ずしも他者への共感性にもとづくものではないことが先行研究から明らかになっている。例えば，不適応的な特性罪悪感を測定していると考えられる Guilt Inventory（Kugler & Jones, 1992）を用いた研究において，特性罪悪感と共感性は関連を示さないという結果が得られている（石川・内山 , 1999）。

そこで, 本研究では「甘え」という概念を取り上げる。「甘え」は，土居（1971）によって提起された精神分析的概念であり，対人関係やパーソナリティの発達に加えて，精神病理や対人的問題について包括的に説明することが可能な概念だからである。また, 土居（1971）は「甘え」理論を展開する中で罪悪感について多くの紙面を割いており，罪悪感に関連する現象が「甘え」理論によって説明できることを示唆しているからである。

土居（1971）によると，「甘え」は，日本人心性を理解する鍵概念であるとともに，文化を越えて人間一般に共通して存在する心理である。「甘え」とは，乳児の精神がある程度発達して，母親が自分とは別の存在であることを知覚した後に，その母親を求めることを指していう言葉である。よって「甘え」は，人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し，分離の痛みを止揚しようとすることであると定義される。

また，土居（1971）が，「甘え」はその後の発達段階においても，新たに人間関係が結ばれる際には少なくともその端緒において必ず甘えが発動していると述べているように，「甘え」をどのように処理していくかは，生涯発達的な問題といえる。したがって，「甘え」の問題を各発達段階における社会文化的文脈に適合するように処理することが発達的に問題となる（谷 , 2000）。そのため，「甘え」の問題をうまく処理できないことによって，対人恐怖や強迫的傾向，うつ病，「自分がない」，自己愛傾向といった様々な対人的，精神的問題を招くことになる（土居 , 1970, 1971, 1994, 1997, 2000, 2001）。土居（1997, 2001）によると，「甘え」には「素直な甘え」とそれが満たされないことによる「屈折した甘え」が存在する。さらに土居（1971, 1994）はこれらに加え，「甘えたくとも甘えられない心」を意味する「とらわれ」を指摘している。土居（1971）によると,「とらわれ」は「甘え」に纏わる葛藤によってもたらされる「甘え」の病的なバリエーションであり，様々な精神病理を導く精神力動である。例えば，対人恐怖は，青年期に特有にみられる神経症であるが（笠原 , 1977），これが生じる背後に「甘えたくとも甘えられない心」である「とらわれ」が存在することが指摘されている（土居 , 1971, 1994）。

このように土居（1971）は，様々な対人的問題や精神病理の根本に「甘え」の問題が存在することを論じている。土居（1971）によると，これらの病理はいずれも個人と他者（集団やより広い意味での社会）との関係といった対人関係上の葛藤を背後にもっており，その葛藤の根源に甘えの問題が存在するのである。この指摘は，罪悪感について考察する上で極めて示唆深いと思われる。というのも，罪悪感が生じる根底に，所属集団の信頼を裏切ることになるのではないかという自覚があると土居（1971）が論じているからである。つまり，罪悪感は，その根本において「甘え」の問題と同様に，個人と他者（集団やより広い意味での社会）との葛藤から生じてくるといえるのである。土居（1971）も述べているように，この葛藤は個人の精神内に内面化され，道徳的規範（精神分析でいう超自我）との葛藤となる。しかし，この道徳的規範も，社会の中でその成員同士が社会秩序を維持するために設けた一定の善悪判断の基準であるため，本質的には対人関係の中にその存在的基礎をおいている。したがって，個人の道徳的規範との葛藤によって生じてくる罪悪感も対人関係上の葛藤を背後にもっており，その根本に「甘え」の問題が潜んでいると考えられるのである。

以上の議論から，精神病理に結びつく不適応的な罪悪感を感じてしまう背景に，「甘え」の問題をうまく処理できていないこと，すなわち「とらわれ」が存在すると考えることができる。

次に，特性罪悪感によって引き起こされる問題であるが，本研究では抑うつ[注1]に着目する。抑うつは，不適応的な特性罪悪感と関連することが多くの実証的研究によって支持されているとともに（Hardar & Zalma, 1990; Harder, Cultler, & Rockart, 1992; Jones & Kugler, 1993; Jones, Kugler, & Adams; 1995; Kugler & Jones, 1992; O’Conner, Berry, & Weiss, 1999; Quiles & Bybee, 1997; 大西 , 印刷中），土居（1994）によってその根本に「甘え」の問題が存在することが指摘されているからである。

ところで，抑うつに対する代表的な心理学的アプローチとして，学習理論，認知理論，精神分析理論が挙げられる。抑うつに関する学理理論は，Seligman（1978）による学習性無力感理論と，それに帰属スタイルを導入した改訂版学習性無力感理論（Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978）がある。抑うつに関する認知理論は，Beck（1983）によって提唱されたものである。Beck（1983）によると, うつ病者には特有の認知の歪み（抑うつスキーマ）が存在し，そのために世界を歪んだ形で構造化しているためうつ病に陥るのである。最後に, 抑うつに関する精神分析理論では, Abraham（1911）

による口唇期固着の議論，それをもとにしたFreud（1917）による対象喪失の議論があり，これはその後に派生した様々な立場の理論に組み入れられ，発展している。これらの理論の中でも，認知理論や精神分析理論において抑うつと罪悪感が関連することが指摘されているが，本研究では，土居（1971）による「甘え」理論にもとづいて議論を行うため，精神分析理論の立場から特性罪悪感と「甘え」および抑うつの関係を実証的に検討することとする。

土居（1994）によると，うつ病者の訴える「自己の内部の何かが失われた」という喪失感は実は周囲との一体感や連帯感であり，うつ病とは，既にそれを失っていながらその事実を認めることが出来ず，いわば過去の幻影にしがみつき，失われたものを求めてもがいている状態であるという。そして，ここで失われながらもそれにしがみついているものこそが，人間の最も基本的な対人欲求である「甘える」ことなのである。つまり，うつ病者は，「甘えたくとも甘えられない」ために過去の幻影にしがみついている状態なのであり，この葛藤の根本に満たされない「甘え」すなわち「とらわれ」が存在しているのである。

特性罪悪感と「甘え」の関係についての議論とあわせて考えると，抑うつは，不適応的な特性罪悪感に影響を受けるとともに，不適応的な特性罪悪感に影響を与える「とらわれ」からも直接的に影響を受けるという因果構造が考えられる。

以上の議論から，本研究は，「甘え」理論から導かれるこれらの因果構造について，実証的に検証することを目的とする。

本研究における仮説は以下の通りである。

(1) 不適応的な特性罪悪感は，「甘え」の問題をうまく処理できていないことに由来する「とらわれ」から正の影響を受けるであろう。

(2)「抑うつ」は，不適応的な特性罪悪感から正の影響を受けるであろう

(3)「抑うつ」は，「とらわれ」から直接的に正の影響をうけるであろう。

なお，これらの概念の測定には，大西（印刷中）による特性罪悪感尺度（Appendix 参照）と谷（2000）による「甘え」尺度，Zung（1965）による自己評価抑うつ性尺度の邦訳版（福田・小林，1973）を用いる。

大西（印刷中）は，罪悪感が集団からの裏切り（それが内面化されたものとしての道徳的規範からの逸脱）から生じてくる点では通文化的であるが，その形態や体験様式は優勢となる文化的自己観（Markus & Kitayama, 1991）によって異なるという議論（土居，1971; 木村，1972; 北山，1998）を受け，相互協調的自己観の優勢な日本文化における自己の特質を考慮した特性罪悪感尺度を作成した。

特性罪悪感尺度は下位尺度として，他者よりも自分の方がいい思いをしているという不衡平の感覚による罪悪感である「利得過剰の罪悪感」と，精神内における対象の定まらない漠然とした罪悪感である「精神内的罪悪感」の2つがあり，これらは通文化的な罪悪感を測定していると考えられている。さらに，「甘え」とその不満による「恨み」のアンビバレンスから生じる罪悪感である「屈折的甘えによる罪悪感」と，相手との関係を乱すことへの懸念による罪悪感である「関係維持のための罪悪感」の2下位尺度がある。「甘え」は前述の通り人間に共通して存在する基本的精神力動であるが，土居（2000）によると日本文化においては「甘え」が許容され，「甘え」と「恨み」のアンビバレンスがなじみ深いという。そのため，「屈折的甘えによる罪悪感」は日本文化の特質を表している下位尺度であると考えられている。さらに，「関係維持のための罪悪感」も，関係の中で自己が規定される相互協調的自己観が優勢な日本文化の特質を反映した下位概念であると考えられている。

特性罪悪感尺度は，罪悪感を喚起するような特定の状況を提示せず，普段どのくらいの頻度で罪悪感を経験するかを評定させる形式であるため，得点が高くなるほど罪悪感経験への過敏さを意味する。そのため，概して不適応的な側面の特性罪悪感を測定する尺度であり，いずれの下位尺度も「とらわれ」によって影響を受けると考えられる。さらに，この中で「精神内的罪悪感」は，Erikson（1959）の漸成発達理論における第Ⅲ段階の感覚（積極性 対 罪悪感）の病理的側面であり，大西（印刷中）において「抑うつ」と比較的高い相関を示していることから，「抑うつ」に正の影響を及ぼすと考えられる。

次に，谷（2000）によって作成された「甘え」尺度は，土居（1970, 1971, 1994, 1997, 2000, 2001）の「甘え」理論を適切に反映した下位概念から構成されている。前述したように土居（1997, 2001）は，「甘え」には「素直な甘え」と「屈折した甘え」の二種類が存在すると述べており，谷（2000）の「甘え」尺度における「直接的甘え」と「屈折的甘え」はこれらに対応している。さらに，土居（1971, 1994）の指摘する「とらわれ」を測定する下位尺度があり，これら3つの下位尺度は相互に関連しあっている。これらの下位尺度とその関連構造については，土居健郎氏本人からその適切さを評価されている（谷，2000）。「甘え」尺度は，全ての下位尺度において「対人恐怖的心性尺度」と正の相関を示したが，その値は「直接的甘え」，「屈折的甘え」，「とらわれ」の順に高くなっており，「とらわれ」においては高い相関を示した。このことから，「甘え」尺度の構成概念的妥当性が示されるとともに，「とらわれ」が病理的傾向が高いことが確認されている（谷，2000）。

以上の尺度を大学生に実施し，統計的に分析を行う。

方法

1．調査対象

兵庫県内の大学生・大学院生306名（男性104名，女性202名）を対象とした。平均年齢は20.20歳（18～25歳）であった。

2．測定尺度

①特性罪悪感尺度（Trait Guilt Scale: 以下 TGS）

大西（印刷中）によって作成された尺度である。「利得過剰の罪悪感（7項目）」，「精神内的罪悪感（7項目）」，「屈折的甘えによる罪悪感（6項目）」，「関係維持のための罪悪感（6項目）」の4下位尺度から構成されている。大西（印刷中）によって十分な信頼性と妥当性を備えていることが確認されている。

本研究における α 係数は,「利得過剰の罪悪感」で α =.901,「精神内的罪悪感」で α =.874,「屈折的甘えによる罪悪感」で α =.931,「関係維持のための罪悪感」で α =.893 であった。

回答は,「1：全くない」「2：まれにある」「3：時々ある」「4：しばしばある」「5：いつもある」の 5 件法である。

②「甘え」尺度

谷（2000）によって作成された尺度である。「直接的甘え（10 項目）」,「屈折的甘え（9 項目）」,「とらわれ（6 項目）」の 3 下位尺度から構成されている。谷（2000）によって，信頼性と妥当性が確認されている。

本研究における α 係数は,「直接的甘え」で α =.851,「屈折的甘え」で α =.863,「とらわれ」で α =.799 であった。

回答は,「1：全くない」「2：まれにある」「3：時々ある」「4：しばしばある」「5：いつもある」の 5 件法である。

③自己評価式抑うつ性尺度（Self-rating Depression Scale: 以下 SDS）

Zung（1965）による尺度の邦訳版（福田・小林 , 1973）である。抑うつを測定するために開発された尺度であり，20 項目から構成される。

本研究における α 係数は，全 20 項目で， α =.808 であった。

回答は,「1：ない，たまに」「2：ときどき」「3：かなりのあいだ」「4：ほとんどいつも」の 4 件法である。

3．実施手続きと調査時期

上記の 3 種の尺度を含む質問紙を講義中に配布し，一斉に実施した。調査時期は，2004 年 12 月であった。

結果

1．TGS と「甘え」尺度および SDS の相関

TGS,「甘え」尺度，SDS の相関結果および各尺度得点の平均値（SD）を Table 1 に示す。TGS,「甘え」尺度，SDS の相関結果および各尺度得点の平均値（SD）を Table 1 に示す。抑うつの平均値は，40.67（7.78）であり，福田・小林（1973）における正常群の平均値（男性 : 35.05(8.00), 女性 : 35.74(14.84)）よりも若干高かったが、うつ疾患者群の平均値（男性 : 59.88(6.07)，女性 : 59.48(8.46)）に比べるとかなり低い値であり，一般青年を対象とした調査であることから，本研究で扱うサンプルは健康群とみなすことができる。

TGS と「甘え」は，全般的に有意な正の相関を示した。「甘え」尺度の各下位尺度についてみていくと,「直接的甘え」とは，TGS の全ての下位尺度との間に同程度の有意な正の相関（r=.242 ～ .315）がみられた。次に,「屈折的甘え」とも全て有意な正の相関（r=.249 ～ .371）がみられた。特に,「屈折的甘えによる罪悪感」との間に最も高い正の相関（r=.371）がみられ,「屈折的甘えによる罪悪感」の構成概念的妥当性を示唆する結果であった。さらに,「とらわれ」とも全て有意な正の相関（r=.350 ～ .713）がみられた。特に,「精神内的罪悪感」および「関係維持のための罪悪感」との間に，高い正の相関（それぞれ r=.713，.517）がみられた。「とらわれ」は「甘え」の中でも病理的傾向が高いものとされていることから,「精神内的罪悪感」と「関係維持のための罪悪感」が，病理的傾向が高いことが示唆された。

次に，TGS と SDS との相関については，TGS の全下位尺度との間に，有意な正の相関（r=.115 ～ .470）がみられた。「精神内的罪悪感」との間には比較的高い正の相関（r=.470）がみられ，高い関連性が示唆された。これに対して，その他の 3 下位尺度との間の相関は，いずれも有意ではあるが値が小さく，関連性が低いことが示唆された。

最後に,「甘え」尺度と SDS の相関では,「甘え」尺度の全下位尺度との間に, いずれも有意な正の相関（r=.236 ～ .537）を示した。特に,「とらわれ」との間の相関（r=.537）が最も高く，関連性が高いことが示唆された。

2．TGS を基準変数とする重回帰分析

「甘え」によって，特性罪悪感がどの程度説明されるかを探索的に検討するために，TGS の各下位尺度を基準変数,「甘え」尺度の各下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。説明変数の投入方法は, 影響力の大きい変数から投入し, 有意でない変数（5% 水準）を除去するステップワイズ法を用いた。なお，いずれの分析においても VIF の値は低く（VIF<1.5），多重共線性の問題はないと判断した。分析結果を Table 2 に示す。

Table1　TGS，「甘え」尺度，SDSの相関および平均値（SD）

	利得過剰	精神内的	屈折	関係維持	直接的甘え	屈折的甘え	とらわれ	平均値（SD）
利得過剰	－							13.94（5.15）
精神内的	.557***	－						13.57（5.30）
屈折	.437***	.388***	－					14.96（5.15）
関係維持	.415***	.562***	.564***	－				16.21（5.00）
直接的甘え	.242***	.294***	.275***	.315***	－			29.35（7.16）
屈折的甘え	.249***	.341***	.371***	.264***	.428***	－		22.45（6.46）
とらわれ	.350***	.713***	.420***	.517***	.401***	.451***	－	15.65（4.93）
SDS	.171**	.470*	.115*	.197**	.236***	.280***	.537***	40.67（7.78）

*p<.05　**p<.01　***p<.001

Table2　TGSの各下位尺度を基準変数とした重回帰分析の結果

基準変数	利得過剰	精神内的	屈折	関係維持
説明変数				
直接的甘え	.121*	−	−	.129*
屈折的甘え	−	−	.262***	−
とらわれ	.302***	.713***	.242***	.465***
説明率（R^2）	.135	.508	.184	.281

*p<.05　**p<.01　***p<.001

まず，「利得過剰の罪悪感」では，「とらわれ」と「直接的甘え」が正の標準偏回帰係数（それぞれ β =.302，.121）を示した。「屈折的甘え」は有意な偏回帰係数を示さず，分析から除外された。これら 2 変数による分散の説明率は 13.5% であった。

次に，「精神内的罪悪感」では，「とらわれ」のみが高い正の標準偏回帰係数（β =.713）を示した。「直接的甘え」および「屈折的甘え」は有意な偏回帰係数を示さず，分析から除外された。「とらわれ」による分散の説明率は 50.8% であった。

さらに，「屈折的甘えによる罪悪感」では，「屈折的甘え」と「とらわれ」がいずれも 0.1% 水準で有意な正の標準偏回帰係数（それぞれ β =.262，.242）を示した。「直接的甘え」は有意な偏回帰係数を示さず，分析から除外された。これら 2 変数による分散の説明率は 18.4% であった。

最後に，「関係維持のための罪悪感」では，「とらわれ」と「直接的甘え」が正の標準偏回帰係数（それぞれ β =.465, .129）を示した。「屈折的甘え」は有意な偏回帰係数を示さず，分析から除外された。これら 2 変数による分散の説明率は 28.1% であった。

以上の分析結果から，TGS の全ての下位尺度に対して「とらわれ」が正の影響を及ぼしていることが明らかになった。また，TGS の下位尺度によって，影響を受ける「甘え」の種類が異なることが示唆された。

3．SDS を基準変数とする重回帰分析

2. と同様に，特性罪悪感および「甘え」によって，「抑うつ」がどの程度説明されるかを探索的に検討するため，SDS を基準変数，TGS および甘え尺度の各下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。変数の投入方法は，上の分析と同様にステップワイズ法を用いた。なお，VIF の値は最大のもので 2.23 と 3 を越える値ではなかったため，多重共線性の問題はないと判断した。分析結果を Table3 に示す。

Table3　SDSを基準変数とした重回帰分析の結果

説明変数			説明率（R^2）
とらわれ	精神内的	関係維持	
.452***	.246**	-.175*	.324

*p<.05　**p<.01　***p<.001

合計 7 つの説明変数のうち，「とらわれ」，「精神内的罪悪感」，「関係維持のための罪悪感」の 3 変数が有意な標準偏回帰係数を示した。「直接的甘え」，「屈折的甘え」，「利得過剰の罪悪感」，「屈折的甘えによる罪悪感」の 4 変数は，有意な偏回帰係数を示さず，分析から除外された。「とらわれ」と「精神内的罪悪感」は，それぞれ正の標準偏回帰係数（β =.452，.246）を示した。これに対して，「関係維持のための罪悪感」では，β =-.175 の負の標準偏回帰係数を示した。これら 3 変数による分散の説明率は 32.4% であった。

4. 特性罪悪感と「甘え」および抑うつのパス解析モデルの検討

以上の重回帰分析の結果を踏まえてモデルを構成し，構造方程式モデリングを用いたパス解析を行った。検討するモデルは以下の通りである（Figure 1）。

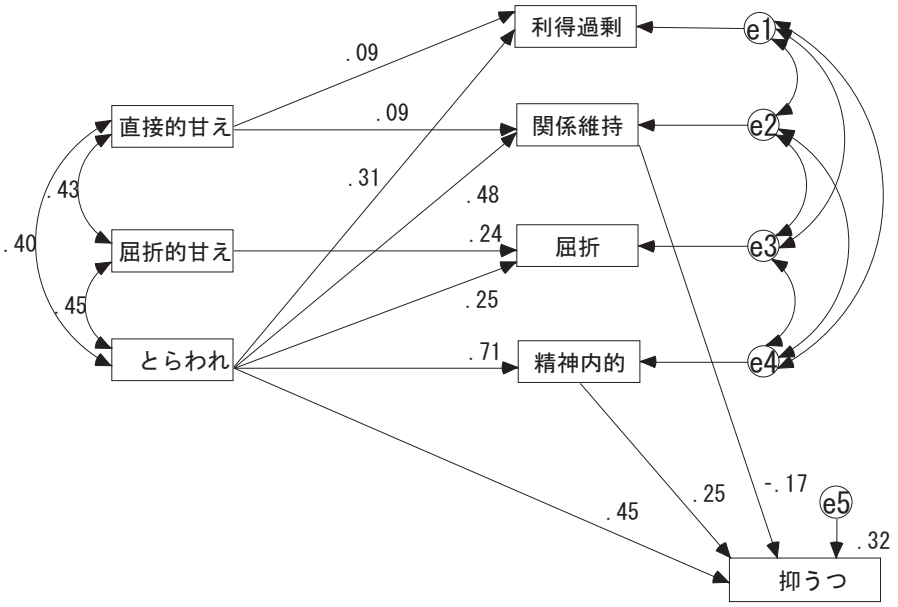

Figure1 特性罪悪感，「甘え」および抑うつのパス解析モデル

まず，TGSの4つの下位尺度得点と甘え尺度の3つの下位尺度得点，SDS得点（「抑うつ」）の合計8変数を観測変数とした。次に，TGSの各下位尺度間に相関があるため，特性罪悪感を構成する4つの観測変数の誤差変数間に共分散（相関）を仮定した。同様に，「甘え」を構成する3つの観測変数間に共分散（相関）を仮定した。さらに，2. で行った重回帰分析の結果をもとに，「甘え」の3つの観測変数から特性罪悪感の4つの観測変数にそれぞれ影響指標（パス）を仮定した。すなわち，「屈折的甘えによる罪悪感」は，「屈折的甘え」と「とらわれ」から，「関係維持のための罪悪感」は，「直接的甘え」と「とらわれ」から，「精神内的罪悪感」は「とらわれ」のみから，「利得過剰の罪悪感」は，「直接的甘え」と「とらわれ」からそれぞれ影響を受けるというモデルである。最後に，3. の重回帰分析で得られた結果にもとづき，「抑うつ」に影響を与える「とらわれ」，「精神内的罪悪感」，「関係維持のための罪悪感」の3つの観測変数から「抑うつ」への影響指標（パス）を仮定した。

分析を行った結果，モデルの適合度指標は，GFI=.993，AGFI=.971，RMSEA=.011といずれも十分な値を示した。「甘え」からTGSの各下位尺度へのパス係数は，「屈折的甘え」から「屈折的甘えによる罪悪感」と，「とらわれ」からTGSの4下位尺度へのパス係数は十分な値を示し，全て0.1%水準で有意となった。しかし，「直接的甘え」から「関係維持のための罪悪感」へのパス係数および「利得過剰の罪悪感」へのパス係数は値が小さく有意とならないものもみられた（それぞれ，$p < .043$，$p < .058$）。次に，TGSから「抑うつ」へのパス係数は，「関係維持のための罪悪感」から「抑うつ」へは1%水準で有意であり，「精神内的罪悪感」からは0.1%水準で有意となった。「とらわれ」から「抑うつ」へは，0.1%水準で有意であった。また，最終的な内生的変数である「抑うつ」の決定係数は.32であり，十分な値であるといえる。

この結果から，TGSのいずれの下位尺度も，「とらわれ」から正の影響を受けていることが示され，不適応的な特性罪悪感は，「甘え」の問題をうまく処理できていないことに由来する「とらわれ」から正の影響を受けるであろうという仮説（1）が支持された。特に，「精神内的罪悪感」と「関係維持のための罪悪感」が強い影響を受けていることが示唆された。

また，「抑うつ」が「とらわれ」から正の影響を受けていたことから，抑うつは，「とらわれ」から直接的に正の影響をうけるであろうという仮説（3）が支持された。

最後に，「抑うつ」が「精神内的罪悪感」から正の影響を受けていることから，「抑うつ」は，不適応的な特性罪悪感から正の影響を受けるであろうという仮説（2）は「精神内的罪悪感」においては支持された。しかし，「抑うつ」は，「関係維持のための罪悪感」からは負の影響を受けており，この点に関しては仮説（2）とは逆の結果であった。これに関して，観測変数の誤差変数間に共分散（相関）を仮定した本モデルにおいても「関係維持のための罪悪感」から「抑うつ」に負の影響を及ぼしているという結果が得られたため，SDSを基準変数とする重回帰分析において多重共線性の問題は起きていないことが確認された。

「抑うつ」へのパス係数は，「とらわれ」からの値が最も大きく，影響力が大きいことが示唆された。また，「とらわれ」は，上述の直接効果とともに，「精神内的罪悪感」を媒介した正の間接効果も示した（β =.18）。さらに，「とらわれ」は，「関係維持のための罪悪感」を媒介して，「抑うつ」へ負の影響を与えるという間接効果も示した。しかし，「関係維持のための罪悪感」から「抑うつ」へのパス係数（β =-.17）の値が小さく，間接効果の影響指標は，β =-.08と極めて小さな値であった。

これらの分析から，「とらわれ」が「抑うつ」への直接効果と，「精神内的罪悪感」および「関係維持のための罪悪感」を媒介した間接効果をもつということが明らかになった。さらに，「関係維持のための罪悪感」が「抑うつ」に対して負の影響力をもつという複雑な関係が見出された。

考察

1．特性罪悪感と「甘え」の関係

「直接的甘え」と「屈折的甘え」は，TGSの全ての下位尺度との間に有意な正の相関を示していたが，重回帰分析およびパス解析の結果では，「直接的甘え」はTGSのいずれの下位尺度に対してもほとんど影響を与えないことが明らかになった。また，「屈折的甘え」は，TGSの「屈折的甘えによる罪悪感」以外には影響を与えていなかった。これらの結果から，「直接的甘え」と「屈折的甘え」が相関分析においてTGSの他の下位尺度と有意な正の相関を示したのは，TGSと「甘え」尺度それぞれの下位尺度間相関による擬相関であると考えられる。また，「屈折的甘え」が「屈折的甘えによる罪悪感」に対して有意な正のパス係数を示したことは，「屈折的甘えによる罪悪感」が「屈折的甘え」を前提にしていることから当然の結果であり，「屈折的甘えによる罪悪感」の構成概念的妥当性を示すものと考えられる。

これに対して「とらわれ」は，相関分析においてTGSのいずれの下位尺度とも中程度以上の正の相関（r=.350 ～ .713）を示し，パス解析においてもTGSの全ての下位尺度に正の影響（β =.26 ～ .71）を与えていた。この結果から，TGSによって測定される特性罪悪感がいずれも病理的特徴を有していることが示唆された。TGSの中でも特に「精神内的罪悪感」に対して最もパス係数が大きく（β =.71），次いで「関係維持のための罪悪感」へのパス係数が大きかった（β =.48）。よって以下では，「甘え」理論の観点から「精神内的罪悪感」と「関係維持のための罪悪感」について考察を行う。

まず，「精神内的罪悪感」は，Eriksonの漸成発達理論にもとづく，社会の中で積極性を発揮することに対して抱かれる漠然とした罪悪感である。漸成発達図式の第Ⅲ段階は，それまでの主に異性の養育者との2者関係から，同性の養育者が加わった3者関係へと環境が変化する時期であり，Freudが最も重要視したエディプス・コンプレックスが問題になる時期である。Erikson（1959）によると，エディプス・コンプレックスをうまく解消できないことによって，社会の中で積極的に自分を表現することや自分で何かを決めてやろうとすることがエディプス的な願望に結びつき，漠然とした罪悪感を感じてしまうのである。そして，積極性をめぐる葛藤は，自分の内的な能力や想像力や感覚能力に応じた行動を拘束するという形で現れてくるという。このような状態には，自分は自ら決めて何かをしたり自分の能力を発揮したりしてはいけない存在であるという，自己の存在すら否定してしまう感覚が背後に存在しており，些細なことで

も罪悪感を感じてしまうのである。

このような懲罰的な自己制止を特徴とする罪悪感について，土居（1970, 1994）は，「いけない」という言葉を用いて「甘え」理論の観点から説明している。土居（1970, 1994）によると，「いけない」という本能衝動の満足を禁止する感情に裏打ちされた罪悪感に悩む場合，そこに満足されない「甘え」の問題が潜んでいる。そしてこのような罪悪感に悩む患者は，自己の中にある攻撃心や「甘え」を制止しており，単に「甘え」を抑圧するというよりも，「甘え」があからさまに禁止されているのである（土居，1994）。この「甘え」の禁止こそが「甘えたくとも甘えられない心」である「とらわれ」を意味しており，「精神内的罪悪感」の背後に存在する精神力動であると考えられる。

それではなぜ「とらわれ」が「精神内的罪悪感」を生じさせるのであろうか。これについては，「甘え」が人間の精神にとって基本的な関係性を示す概念であるということや，「甘え」が「愛されたい欲求」を意味する受身的対象愛（Balint, 1956）と非常に類似しているという土居（2001）の指摘に着目すると理解できると思われる。すなわち，「甘え」は他者の存在を前提としており，「甘え」が満たされるのは相手次第である。そして「甘え」が満たされている場合には，相手との間に良好な関係性があるといえる。逆に「とらわれ」のように「甘え」が満たされず，あからさまに禁止されている場合は，相手やより広い意味での周囲の環境を，容易に「甘え」を満たしてくれない極めて厳しいものであると捉えてしまうと考えられる。それとともに，そのように甘えを満たしてもらえない自分自身をも否定的なものとみなし，そのようになってしまったのは自分自身がそれに値しない罪深い存在だからであると捉えてしまうのである。その結果，通常人間が求める様々な欲求を満たすことに対して，自分にはその資格がないのだと考えてしまい，「精神内的罪悪感」のような極めて懲罰的で不合理な罪悪感を感じてしまうのであると考えられる。

次に，「関係維持のための罪悪感」は，罪悪感が自己の内部ではなく，他者へと向かっている点が「精神内的罪悪感」と大きく異なる。すなわち，相手との関係の中で，わだかまり，気がねして，正しいと思うことに対しても「すまない」という罪悪感を感じてしまうのである。この「すまない」という罪悪感は，関係を乱してしまうことに対する懸念であり，北山（1992）は，周りに濁りや乱れ，騒ぎを生じさせたことについて「すまない」と言い，相手だけではなく自分も内的にすんでいない（澄んでいない）ことを進んで認め，謝罪の言葉としていると述べている。そこには，過剰に周囲を気にし，関係の調和を保とうとしている姿がみてとられ，関係の中に埋没している状態であると考えられる。そして，実際に何か悪いことをしているわけではないのに，「すまない」という罪悪感を感じてしまうのである。これに関して土居（1994）は，神経症患者において「すまない」という感情が顕著にみられる場合には，実際に与えた害というよりも，自分が与えたであろう想像上の害を懸念していると指摘している。またこのような患者では，攻撃的な衝動が隠れた形で存在しており，その背後に満たされない「甘え」が存在することを指摘している。ここでの満たされない「甘え」は，「精神内的罪悪感」の場合と同様に「甘えたくとも甘えられない心」である「とらわれ」にほかならない。

このように「関係維持のための罪悪感」が生じる背後にも「とらわれ」が存在しているのであるが，「関係維持のための罪悪感」においては，「とらわれ」による「甘え」の禁止が相対的に弱いために，「甘え」を満たしてくれない厳しい環境に対して自ら罪悪感を感じることで関係を繋ぎとめようとする心理が働いていると考えられる。そして，そこには，他者との関係を重視する日本文化的自己の特徴が表れていると考えられる。

2．「甘え」と「抑うつ」の関係

「直接的甘え」と「屈折的甘え」は，「抑うつ」に対して影響を及ぼさないことが明らかになった。この結果から，「甘え」が満たされる場合は当然であるが，「甘え」が満たされず屈折してしまったとしても，「抑うつ」に影響を及ぼすほど深刻な事態に結びつかないことが示唆された。これは，「甘え」が許容され，「甘え」と「屈折した甘え」の現れである「恨み」のアンビバレンスがなじみ深い（土居，2000）という日本文化の特質によるものと解釈できるかもしれない。

これに対して，「とらわれ」は「抑うつ」に対して正の比較的強い影響（β =.45）を及ぼしていた。これは，うつ病者の訴える「自己の内部の何かが失われた」という喪失感が，「甘えたくとも甘えられない心」を意味する「とらわれ」によって生じてくるという土居（1994）の理論的考察を支持する結果であった。また，本研究における仮説（3）を支持する結果であった。

土居（2001）によると，「甘え」は人間の最も基本的な依存欲求を意味するのであるが，「甘え」について意識するときは，必ずといってよい程，甘えられない状態である。つまり，「甘え」は，よほど内省するのでない限り意識されないという非内省的・非言語的に起きている微妙な愛情表出を伴うものなのである。そのため，「甘えたくとも甘えられない」場合は，前述のとおり「甘え」があからさまに禁止されている状態であるため，漠然とした喪失感として体験されると考えられる。しかし，「甘え」は人間存在にとって極めて根源的で重要なものであるため，強烈な欠乏感によって失われた何かを求めてもがくのである。しかし，失われた一体感（甘え）は戻ってこないために，抑うつ状態に陥ってしまうと考えられる。

3．特性罪悪感と「抑うつ」の関係

特性罪悪感と「抑うつ」の関係については，「精神内的罪悪感」が「抑うつ」に対して正のパス係数を示したことから，「精神内的罪悪感」においては，仮説（2）が支持されたといえる。しかし，「関係維持のための罪悪感」が「抑うつ」に対して弱いながらも負のパス係数を示したことは，仮説（2）とは逆の結果であった。

まず，「精神内的罪悪感」については，極めて不合理な特徴をもった罪悪感であるため，「抑うつ」に正の影響を及ぼすことは妥当な結果であろう。前述の通り，「精神内的罪悪感」は，自分は自ら決めて何かをしたり自分の能力を発揮したりしてはいけない存在であるという，自己の存在をも罪深い者として否定してしまう感覚が背後に存在していると考えられる。その結果，抑うつ状態に陥ってしまうと考えられる。

これに対して「関係維持のための罪悪感」が「抑うつ」に対して弱い値ではあるが有意な負のパス係数を示したことは，一見不合理

な結果と考えられるかもしれない。しかし，日本的自己の特質を考えた場合，この結果は妥当なものであると考えることができる。すなわち，「関係維持のための罪悪感」は，相互協調的自己観の優勢な日本文化の特質を反映した特性罪悪感であり，他者との関係を重視するために罪悪感を感じてしまうという点が特徴である。北山（1998）によると，日本人は他者との関係によって自己が規定されるため，他者との良好な関係を維持することはいわば至上命題ともいえるものである。そのため，他者とうまく関係が築けない場合は，自己存在に大きな打撃を受けることになってしまう。前述の通り，自己存在への否定は，抑うつ状態につながるものである。そのため，他者との関係をうまく維持していくために，常に他者の視点に立ち，他者を気遣うことに力を注ぐのである（北山，1998）。「関係維持のための罪悪感」は，他者との関係が悪くなることに対する懸念から生じてくる罪悪感であるため，それを感じることで他者との関係を維持することに寄与するのである。そのため，他者との関係が断絶するような事態を回避し，結果としてそこから生じる抑うつ状態に陥ることを防ぐことに寄与していると考えられる。

このように，「抑うつ」に対して，特性罪悪感の種類によって正の影響と負の影響を及ぼすことが明らかになった。

4．抑うつの理解に向けて

本研究の分析結果から，「抑うつ」に対して「とらわれ」と「精神内的罪悪感」が正の影響を，「関係維持のための罪悪感」が負の影響を及ぼしていることが明らかになった。パス係数の大きさは，「とらわれ」が最も大きく（β =.45），次いで「精神内的罪悪感」（β =.25），最後に「関係維持のための罪悪感」（β =-.17）という順であった。また，「とらわれ」は「抑うつ」に対する正の直接効果だけでなく，「精神内的罪悪感」を媒介した正の間接効果も示していることから，「とらわれ」が直接的に「抑うつ」を引き起こす場合の他に，懲罰的な自己制止を特徴とする「精神内的罪悪感」というかたちをとって「抑うつ」へ正の影響を与えている場合もあることが示唆された。

これらの結果から，「抑うつ」が問題となる場合は，最も影響力の大きな要因として「とらわれ」が背後に潜んでおり，「抑うつ」の理解には，「とらわれ」に焦点を当てることが重要であると考えられよう。また，それによって「とらわれ」が「精神内的罪悪感」のような懲罰的な自己制止を特徴とする罪悪感のかたちをとって表れているという理解ができるかもしれない。

ただし，「抑うつ」に対する「精神内的罪悪感」固有の影響力もあるため，「精神内的罪悪感」に焦点を当てることも必要であろう。「精神内的罪悪感」は，前述の通り，極めて厳しい懲罰的な自己制止を伴う罪悪感であり，自己の存在すら罪深い者として否定的にみなすという心理が特徴である。そのため，「抑うつ」を，「精神内的罪悪感」の影響による極端な自己の存在価値の低下として理解することが必要であろう。また，罪悪感が本質的には個人と他者（集団やより広い意味での社会）との葛藤から生じるという土居（1971）の指摘に鑑みるならば，「精神内的罪悪感」において個人の精神内で完結してしまっている葛藤を，現実的な関係の中へと引き入れて捉えなおすことが「抑うつ」を理解する上で有効かもしれない。

最後に，「関係維持のための罪悪感」が，「とらわれ」から正の影響を受けながらも「抑うつ」を抑制する効果を有していることから，不適応的な特性罪悪感が，単に「とらわれている」ということだけでは説明できない複雑な概念であることを示唆している。「関係維持のための罪悪感」は，罪悪感という苦痛を伴う感情でありながらも他者との関係を維持することに寄与しているのであり，「とらわれ」から正の影響を受けているとはいえ，必ずしも不適応的な特性罪悪感とはいえないことが示唆された。そしてこの結果は，少なくとも日本人が精神的健康を保つ上で，他者と良好な関係を維持することの重要さを表わしていると考えられる。

5．今後の課題

本研究において構成されたモデルの最終的な内生的変数である「抑うつ」は，決定係数があまり高い値ではなかった。このことは，モデルで検討した要因以外に，考慮に入れる余地のある他の要因が存在することを示唆している。例えば，うつ病の前駆状態として絶望感があることが指摘されているため，絶望感を要因として取り入れたモデルについて検討し，より抑うつを説明できるモデルを構成することが今後の課題として挙げられる。

また，「甘え」によって特性罪悪感がどの程度説明されるかを検討したところ，「とらわれ」が TGS の全ての下位尺度に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。しかし，「精神内的罪悪感」を除く 3 つの下位尺度においては決定係数が十分な値ではなかったため，「とらわれ」以外の要因についても検討する必要があると考えられる。これら 3 つの特性罪悪感は，他者に対する申し訳なさが顕著である点が共通しているため，他者への配慮を測定するような変数を考慮に入れることにより，これらをより説明できると考えられる。

引用文献

アブラハム，K.　大野美都子（訳）(1993). 躁うつ病およびその類似状態の精神分析的研究と治療のための端緒　下坂幸三・前野光弘・大野美都子（訳）　アーブラハム論文集　岩崎学術出版社 pp.1-18.（Abraham, K. (1911). *Ansätze zur psychoanalytischen Enforschung und Behandlung des manisch-depressiven Irreseins und verwandter Züstande.*）（*Notes on the psychoanalytic investigation and treatment of manic-depressive insanity and alliedconditions.* Selected Papers of Karl Abraham, M.D. London : Hogarth Press and Institute of Psycho-Analysis, 1927.）

Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. (1978). Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnomal Psychology,* **87**, 49-74.

有光興記 (2006). 罪悪感，羞恥心と共感性の関係　心理学研究，**77**, 97-104.

Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Hertherton, T. F. (1994). Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin,* **115**, 243-267.

バリント ,M. 森茂起・枡矢和子・中井久夫（訳）(1999). 一次愛と精神分析技法　みすず書房（Balint, M. (1956). *Primary Love and Psycho-analytic Tecnique.* London: Tavistock Publications）

Beck, A. T. (1983). Cognitive therapy of depression: New

perspectives. In P. Clayton & J. Barrett (Eds.), *Treatment of depression: Old controversies and new approaches*, New York: Raven Press. pp.265-290.

土居健郎 (1970). 精神分析と精神病理〔第 2 版〕 医学書院

土居健郎 (1971).「甘え」の構造　弘文堂

土居健郎 (1994). 日常語の精神分析　医学書院

土居健郎 (1997).「甘え」理論と精神分析療法　金剛出版

土居健郎 (2000). 土居健郎選集 2　岩波書店

土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造　弘文堂

エリクソン , E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性　誠心書房 (Erikson, E. H. 1959　*Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. 1980)

フロイト , S. 井村恒朗 (訳) (1970). 悲哀とメランコリー　フロイト著作集　6　人文書院　pp.137-149. (Freud,S. (1917). *Trauter und Melancholie,* GW, Bd. X)

福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究　精神神経学雑, **75**, 673-679.

Harder, D. W., Cultler, L., & Rockart, L. (1992). Assessment of shame and guilt and their relationships to psychopathology. *Journal of Personality Assessment,* **59**, 584-604.

Harder, D. W., & Zalma, A. (1990). Two promising shame and guilt scales: A construct validity comparison. *Journal of Personality Assessment,* **55**, 729-745.

Hoffman, M. L. (1977). Moral internalization : Current theory and research. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology* (Vol.10) New York: Academic Press. pp.86-135.

Hoffman, M. L. (2000). Empathy and Moral Development. Cambridge: Cambridge University Press.（ホフマン , M. L. 菊池章夫・二宮克美（訳）(2001). 共感と道徳性の発達心理学　川島書店

石川隆行・内山伊知郎 (1999). 共感性・社会的責任感が大学生の罪悪感に及ぼす影響　日本心理学会第 63 回発表論文集, 923.

Jones,W. H. & Kugler, K. E. (1993). Interpersonal correlations of The Guilt Inventory. *Journal of Personality Assessment,* **61**, 246-258.

Jones, W. H., Kugler, K. E., & Adams, P. (1995). You always hurt the one you love: Guilt and transgressions against relationshippartners. In J. P. Tangney & K. W. Fisher（Eds.）, *Self-conscius smotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp.301-321.

笠原　嘉 (1977). 青年期：精神病理学から　中央公論社

木村 敏 (1972). 人と人との間　弘文堂

北山　修（編）(1992). ことばの心理学　日常臨床語辞典　イマーゴ増刊 ,3, 青土社

北山 忍 (1998). 自己と感情－文化心理学による問いかけ－　共立出版

Kugler, K. E., & Jones, W. H. (1992). On conceptualizing and assessing guilt. *Journal of Personality and Social Psychology,* **62**, 318-327.

Lewis, M. (1992). Shame: The exposed self. New York : Free Press.（ルイス , M. 高橋恵子（監訳）(1997). 恥の心理学　ミネルヴァ書房 .）

Markus, H.,& Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review,* **98**, 224-253.

Mascolo, M. F., & Fischer, K. W. (1995). Developmental transformation in appraisals for pride, shame, and guilt In J. P. Tangney & K. W. Fisher（Eds.）, *Self-conscius smotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp.64-113.

O' Conner, L. E., Berry, J. W., & Weiss, J. (1999). Interpersonal guilt , shame, and psychological problems. *Journal of Social and Clinical Psychology,* **18**, 181-203.

大西将史 (印刷中). 罪悪感の概念整理と測定に関する研究 - 新たな特性罪悪感尺度の作成 -　パーソナリティ研究

Quiles, Z. N., & Bybee, J. (1997). Chlonic and Predispositional Guilt : Relations to Mental Health, Prosocial Behavior, and Religiosity. *Journal of Personality Assessment,* **69**, 104-126.

セリグマン , M. E. P.　平井久・木村駿（監訳）(1985). うつ病の行動学　誠信書房（Seligman, M. E. P. (1975). *Hoplessness: On depression, development, and, death,* San Francisco : W. H. Freeman）

Stipek, D. (1995). Development of pride and shame in toddlers. In J. P. Tangney & K. W. Fisher（Eds.）, *Self-conscius smotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp.237-252.

Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and Guilt*. New York: Guilford Press.

Tangney, J. P., Marschall, D. E., Rosenberg, K., Barlow, D. H., & Wagner, P. E. (1994). Children' s and adults' autobiographical accounts of shame, guilt, and pride experiences: An analysis of sutuational determinants and interpersonal concerns. Manuscript under review, George Mason University.

Tangney, J. P., Miller, R. S., Flicker, L., & Barlow, D. H. (1996). Are Shame, Guilt, and Embarrassment Distinct Emotions? *Journal of Personality and Social Psychology,* **70**, 1256-1269.

Tangney, J. P., & Salovey, P. (1999). Problematic Social Emotions: Shame, Guilt, Jealousy, and Envy. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), The social psychology of emotional and behavioral problems : interfaces of social and clinical psychology. American Psychological Association. pp167-196.（タングネー , J. P. & サロベイ , P. (2001). 恥・罪悪感・嫉妬・妬み：問題をはらむ社会的感情　コワルスキー , R. M. & リアリー , M. R. 安藤清志・丹野義彦（訳編）　臨床社会心理学の進歩　北大路書房　pp.191-221.）

Tangney, J. P., Wagner, P., Fletcher, C., & Gramzow, R. (1992). Shame into anger? The relation of shame and guilt to anger and self-reported aggression. *Journal of Personality and Social Psychology,* **62**, 669-675.

谷　冬彦 (2000). 青年期における「甘え」の構造　相模女子大学紀要 , **63A**, 1-8.

内沼幸雄 (1977). 対人恐怖の人間学－恥・罪・善意の彼岸－　弘文堂

横田正夫　罪悪感　中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁枡算男・立花政夫・箱田裕司（編）(1999). 心理学辞典　有斐閣 p.287

Zung, W. W. K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry,* **12**, 63-7.

注１　本研究では，うつ病とうつ病の症状としての抑うつ症状の両方を指す概念として抑うつを用いることとする。

Appendix　特性罪悪感尺度の項目

1　自分だけが目をかけてもらっているようで，他の人に対して申し訳なく思う
2　何か過ちを犯しているようで，罪悪感を感じる
3　ひねくれたあとで，相手に対してうしろめたく思う
4　相手に悪いと思って，誤りを指摘することにためらいを感じる
5　人よりもいい思いをしているようで，うしろめたく感じる
6　自分のしていることが何かまちがっているようで，いけないと思う
7　すねたような態度をとったあとで，相手に対して申し訳なく思う
8　正しいことだと分かっていても，相手に悪いと思って言い出しにくいと思う
9　自分の方が，得をしているようで，相手に申し訳なく思う
10　何かにつけて，いけないことをしているのではないかと思う
11　ふてくされた態度をとっていても，あとで悪かったと思う
12　全く正しいことなのに，相手にすまないと感じて言い出しづらいと思う
13　自分ばかりよくしてもらっているようで，他の人に対して申し訳なく思う
14　何となく罪悪感を感じて，いろいろな物事に積極的に取り組めない
15　恨みを抱いていた相手に対して，あとですまないと思う
16　本当のことでも，それをあからさまに相手に伝えることに罪悪感を感じる
17　みんなの中で自分だけが得をしているようで，他の人にうしろめたく感じる
18　何かにつけて気がとがめられる
19　人に対して憎しみを向けていたが，あとになって罪悪感を感じる
20　相手の明らかな間違いでも，それを指摘することにすまないと感じる
21　みんな同じようにやっているのに，自分だけが誉められて他の人にすまないと思う
22　しばしば取り返しのつかないことをしてしまったように思えて，罪悪感を感じる
23　相手に対してむかついていても，あとですまないと思う
24　怒って当然のことでも，いけないと思って相手にぶつけることを遠慮しがちである
25　同じ立場なのに，特別扱いをされると他の人に罪悪感を感じる
26　自分で決めて何かをしようとすると，何となく罪悪感を感じる

※下位尺度を構成する項目は以下の通りである
利得過剰の罪悪感：1, 5, 9, 13, 17, 21, 25
精神内的罪悪感：2, 6, 10, 14, 18, 22, 26
屈折的甘えによる罪悪感：3, 7, 11, 15, 19, 23
関係維持のための罪悪感：4, 8, 12, 16, 20, 24